

キャピタルとしてその保持者に優位をもたらす。

構造同値からソーシャル・キャピタルへ

先に構造同値という概念は、「構造同値である」か「構造同値ではない」かといった二者択一しかないという説明をした。図2・2の事例もそうである。厳密に考えればこれは正しい。しかし、現実の複雑、多様な人間関係において、厳密な意味で完全に構造同値の関係を持つ人はありえない。他者と完全に同一な人間関係を持つ人などはありえないという意味で、すべての人間は独自の関係パターンを持つユニークな存在なのである。

構造同値は特定の文脈で関係の構造をとらえ、関係に限定を加えたときにのみ初めて把握しうる特性なのだ。それでも複数の人間の関係を比較したときに、完全に構造同値な関係ではなくとも、似通った関係のパターンを持つ者と、まったくかけ離れた関係のパターンを持つ者がいることも事実である。

関係の類似度を相対的にとらえ、比較的似た関係を持つ人々とそうでない人々とを分類することは可能だろう。そのためには構造同値性を、同値か否かの二値変数としてではなく、「まったく共通性がない」「少しは共通性がある」「完全に共通している」といったように、連続的な変数としてとらえればよい。

バートは、ネットワーク内の特定の2人について、それ以外の他者と持つ関係の共通性から、構造同値性をユークリッド距離を使って計算するモデルをつくっている。

一つのネットワークの中で、AさんとBさんが保持する関係が完全に一致すれば、2人の距離は0。2人の持つ第三者、第四者などとの関係のパターンが違えば違うほど、ユークリッド距離が大きくなっていく。

なお、これを数式で書くと、ネットワークをkとすると、

$$d_{ij} = d_{ji} = \left\{ \sum_{k=1}^K \sum_{q=1}^K \left[(z_{iqk} - z_{jqk})^2 + (z_{qik} - z_{qjk})^2 \right] \right\}^{1/2}$$

となる。

ここでは、Aさんがi、Bさんがjとなり、ネットワーク内に存在する他の人々である第三者、第四者……がqにあたる。

バートは、こうして連続量でとらえられた構造同値と他者の直接結合関係のコンビネーション